

## 龍谷大学と三論教学

奥野光賢

## 一 はじめに

私は、平成十三年度学校法人駒澤大学の公費在外研究員（国内長期研修）として、二〇〇一年四月一日より二〇〇二年三月三十一日までの一年間、龍谷大学において国内研修を行なう機会に恵まれた。もとより胸を張って研究成果と呼べるものは何もないが、国内研修を行なうにあつてお世話になった方々への感謝の意を込めて、ここに聊かの研修報告をなしておきたいと思ふ。

まず今回、私が研修先として龍谷大学を選んだのは、私が現在関心を抱いている分野の研究機関として、龍谷大学が最も適していると判断したためであり、そしてそのことは本報告を読んでいただければ自ずと了解していただけるものと確信するが、実際のところは指導教授をお願いした浅田正博先生に完全に甘えるかたちでお引き受けいただいたというのが実情なのである。

浅田先生は、一九八九年度の龍谷大学の研究員として一年間、東京大学へ内地留学なされている。その折、先生は当時週に一度行なわれていた本学の池田魯参教授の課外の演習、『四明尊者教行録』講読にも参加されていたのである。私が先生と初めてお会いしたのは

駒澤短期大学佛敎論集第八號 二〇〇二年十月

二〇五

その演習においてであり、以後面識をいただいたことをご縁に抜刷をお送りするなどしてご指導をいただいていたのであった。抜刷をお送りすると先生は決まって丁寧な返信を下された。まだ就職でできなかったオーバードクターの頃、私はそのお便りに大いに元気づけられたのである。その頃、浅田先生と共に学外より励まして下さったのが、藤井教公先生、菅野博史先生であるが、お三人とも共に大倉精神文化研究所の研究員であったというのも私には何か不思議な因縁のように感ぜられている。

正直に告白すれば、今回の研修はかかる浅田先生を頼って私の方から一方的にお願いしてお引き受けいただいたというのが率直なところなのである。このように当方の一方的な無理なお願ひにもかかわらず、以下に述べるように浅田先生ご夫妻には今回の研修の最初から最後まで大変なお世話をいただいたのである。顧みて、京都での一年間、有意義な時間を過ごすことができたのは、ひとえに先生ご夫妻のおかげであり、何はさておき、ここに衷心より御礼申し上げます。

さて、今回の研修は、実質的には二〇〇一年二月十九日、浅田先生と龍大学院OBの竹中尚文氏を煩わせて連れて行っていただいた

## 龍谷大学と三論教学（奥野）

二〇六

た、龍谷大学深草学舎内にある生協での寄宿先探しから始まった。同生協の紹介によって、寄宿先を京阪宇治線「桃山南口駅」近くの京都市伏見区桃山町養斎に定めることにしたが、結果的に私にとってこの地は絶好の場所となったのである。寄宿先は、すぐ前を山科川が流れ、背後には明治天皇を祀った桃山御陵があり、そしてペランダからは醍醐の山々や道元禪師ゆかりの松殿山荘のある宇治木幡の丘陵が眺望できるといふ抜群の環境にあつた。

## 二 龍谷大学深草学舎

上記のように寄宿先を定め、三月二十二日十五時〇九分新横浜発の「のぞみ19号」で家族と共に京都に向かったが、浅田先生にご案内いただいた龍谷大学深草学舎内にある、今回の国内研修の正式な窓口となった「研究事務課」(この「研究事務課」は私の滞在中「研究推進課」と名称が変更された)で諸手続を済ませたのは、三月二十七日のことである。

周知のように、龍谷大学は下京区七条大宮にある「大宮学舎」と、伏見区深草の「深草学舎」<sup>1)</sup>、それに近年新しく設けられた大津市瀬田の「瀬田学舎」の三つのキャンパスよりなるが、その中心をなすのが大学本部のある深草学舎である。今回の研修では、浅田先生と龍谷大学事務部局の特段のご配慮により、深草学舎紫英館の五三五号室を研究室として使用させていただけるという幸運に恵まれたが、深草はわが道元禪師ゆかりの地であり、その深草を中心に研究活動が出来るようになったのも何かのめぐり合わせといえよう。お借りした研究室からは東山三十六峰の最後を飾る稲荷山、その手前には石峰寺や宝塔寺、左手奥には遠く東福寺の屋根屋根、そして伏見稲

荷の鳥居等が眺望でき、居ながらにして四季折々の景観を楽しむことができた。また、研究棟である紫英館自体がとても機能的に出来ており感心させられることが多かった。

深草学舎は、師団街道と第一軍道の交差点一帯に位置していることから知られるように、もともとは旧日本陸軍練兵場跡であり、終戦後その地に駐留した米軍キャンプ施設を昭和三十年代後半に取得して建設が始まったとされる。研修期間中、学内でたまたま手にした龍谷大学の広報誌「龍谷」第五十号には、開設当時の深草キャンパスの様子が「龍大歴史散歩」として写真入りで紹介されていたが、今日の発展の様子はまさに隔世の感という外はない。

深草キャンパス開発当時のことについて、前学長の北畠典生博士は、次のように述懐し、当時の増山顕珠学長（一九五八年六月―一九六四年五月）や学監であった佐藤哲英博士のご苦勞を讃えている。昭和三十六年秋のことです。

龍大が文化系総合大学をめざして新しい土地を深草に求め、教育・研究に適するように環境の整備が急がれていた頃ですが、現在の深草学舎の正門を入った右（東）側一帯には七・八十センチもある草が生えていました。地名の示す通り深草であったのです。夏休みも過ぎたある日の午後、学監をつとめておられた佐藤先生が、ヒサシの大きい麦わら帽子をかぶって、モクモクと鎌で草を刈っておられるではありませんか。驚いた私が手伝いを申し出たところ、「ぼくは若い頃から草刈りは慣れている。君らにケガをされては困る。気をつかいなさんな。ぼくにまかせておきなさい。」とのお言葉。大変に恐縮したことを思い出します。

深草の新天地開拓にかけられた先生の情熱の一端を垣間見たような気がしました。頭と口は言わずもがな、手も足も存分に駆使された先生でありました。深草の土地と建物の払い下げなどについても、裏方さんに徹した佐藤先生は、増山学長のもことで龍大の拡充策を具体的に推進された第一の功労者であったのです。深草学舎の顕真館（講堂）の落成を見とどけられた先生は、殊のほか喜びでいらっしやいました。そして、竣工記念の講演会の講師としての御出講が、先生の最後の講演でもあったわけです。

この北昌博士のご文章にもあるように、深草学舎の中央に位置し、深草学舎のシンボルとなっているのが礼拝堂「顕真館」で、この建物は全国の卒業生からの浄財によって建てられたものであると聞いた。「顕真館」完成の喜びを、その建設のために挺身されたという当時の龍谷大学宗教部長山崎慶輝教授が次のように記しておられるのを、つい最近まったく別の関心から読むことを得た、上田晃圓「日本上代における唯識の研究」（永田文昌堂、一九八五年）に寄せた山崎教授の序文によって知った。

今年には龍谷大学深草学舎に、多年の念願であった礼拝堂「顕真館」が竣工し、その正面には現代日本画壇の第一人者である平山郁夫画伯の「祇園精舎釈迦説法図」の陶板が飾られた。林のなかで静かに法を説かれる釈尊のお姿が印象的である。この絵を見るために全国各地から、同窓生はもとより、本学に関係のない人までが訪ねてきて、深草の名所になりつつある。

右の山崎教授の言にもあるように、「顕真館」正面の平山郁夫画伯の「祇園精舎釈迦説法図」は本当に見事で素晴らしいものであった。

龍谷大学と三論教学（奥野）

二〇七

龍谷大学と三論教学（奥野）

二〇八

また、これら『三論玄義』の研究に先立ち、龍谷大学では次のような諸先学による三論教学乃至三論学派に関する研究がなされていることも忘れてはならないであろう。

- ⑦ 佐々木憲昭「古三論に於ける教判」（『六條学報』第七十六号、一九〇八年二月）
- ⑧ 佐々木憲昭「興皇法朗の教学所説を論ず」（『六條学報』第百号、一九一〇年一月）
- ⑨ 三井淳辨「南地三論の教系を論ず」（『六條学報』第百号、一九一〇年一月）
- ⑩ 三井淳辨「真宗と三論教との関係を論ず」（『六條学報』第百一号、一九一〇年三月）
- ⑪ 佐々木憲徳「撰領僧詮の二諦義」（『六條学報』第百五号、一九一〇年七月）
- ⑫ 佐々木憲徳「高麗之朗大師」（『六條学報』第百七号、一九一〇年九月）
- ⑬ 佐々木憲徳「四論教学之研究」（『六條学報』第百十号、一九一〇年十二月）
- ⑭ 瀬成世眼「三論の精神慰安法」（一）（二）（三）（元）（龍谷大学論集』第一七〇号、第一七四号、第一八二号、一九一五年十一月、一九一六年四月、一九一六年十二月）
- ⑮ 佐藤哲英「梁朝」十三家の二諦説」（『龍谷大学論集』第二九八号、一九三二年七月）
- ⑯ 三井淳辨「曇鸞の四論教学と其教系」（『高田学報』第一号、一九三二年一月）

なお、礼拝施設としての筆者が垣間見た顕真館の様子等については、「龍谷大学における宗教教育について」の項で少しく述べてみたい。

### 三 龍谷大学における三論教学研究

わが国の三論教学の研究が、その当初より吉藏（五四九—六一三）の『三論玄義』研究を中心に進められ、その傾向が明治以降も続いてきたことは、広く知られるところであるが、私は龍谷大学こそわが国近代における三論教学研究の発祥の地であると考えている。それは、以下に見るような龍谷大学関係者の研究成果を列挙すれば、誰もが納得することであろう。

- ① 村上専精『三論玄義講義』（哲学館、一九〇二年）
  - ② 前田慧雲『三論玄義講話録』（興教書院、一九〇二年）
  - ③ 前田慧雲『三論宗綱要』（丙午社、一九二〇年）
  - ④ 高雄義堅『三論玄義解説』（興教書院、一九三六年）
  - ⑤ 佐々木憲徳「啓蒙三論玄義通観」（山崎宝文館、一九三六年）
- この中、④の前田慧雲『三論宗綱要』は、後に平井俊榮博士の『中国般若思想史研究—吉藏と三論学派』（春秋社、一九七六年）が出版されるまで、唯一の三論宗の要義をまとめた解説書として、多くの読者を裨益してきた。⑤の高雄義堅『三論玄義解説』は、今日に至るまで『三論玄義』に対する最高の解説書として名高いものである。同書は、その「題言」によれば、「昭和九年の安居講習会に副講として玄義を講ずるに当り、その参考に資せんが為に編述を企てたものである」（二頁）という。高雄博士の安居講義に先立って、出版されたのが、

⑥ 龍谷大学編『講本三論玄義』（龍谷大学出版部、一九三二年）

⑦ 佐藤哲英「三論学派における約教二諦説の承譜—三論宗の相承論に対する疑問」（『龍谷大学論集』第三八〇号、一九六六年三月）<sup>23)</sup>

では、なぜ龍谷大学ではかくも多くの三論研究がなされたのであろうか。今回、そのような意識をもって改めて前記の論考を通読してみると、⑨三井淳辨「南地三論の教系を論ず」中に、次のような興味ある記述を認めることができた。

然るに余、昨年中秋法相宗管長佐伯定胤僧正に随伴して南都東大寺に遊び、寺僧管沼文学士の案内にて、同寺附属の南都仏教図書館を参観し、貴重品書類中に於て、『三論祖師伝集』三巻 智光撰『浄名略疏』七冊、宗性上人抜出の『名僧伝』二巻を得たり、何れも宗祖見真大師晩年時代に書写せしものなり、余之れ等の古文書を披見するに及んで曇鸞研究に聊か曙光を得たるを覚ゆ、されば之れ等の資料に依りて鄙見を陳述せん。

（傍線部＝奥野）

すなわち、三井博士らは前記のような三論学派に対する研究をなすにあたって、東大寺図書館等に赴き、実地に南都に伝わるあまたの写本に接していたのである。龍谷大学図書館には、多くの三論関係の写本が所蔵されており、われわれは「龍谷大学と漢書分類目録（仏教之部）」、伊藤隆寿「三論宗関係典籍目録（稿）」<sup>24)</sup>によって、所蔵されている三論関係の文献を容易に知ることができ、今回それらの写本の幾つかを調査してみると、それらは原写本ではなくその多くが江戸期や明治期のいわゆる臨写本であることがわかった。<sup>25)</sup>いま参考までに伊藤目録の中から写本に限って、龍大所蔵の三論宗関係文献を摘録してみれば次の通りである。

- \* 三 一乘仏性慧日抄 一卷 円宗 龍大(写)<sup>(30)</sup>
- \* 四一 鳩摩羅什法師大義(大乘大義章) 三卷 龍大(明治時代写)<sup>(31)</sup>
- \* 四五 華嚴遊意卷第一 一卷 吉蔵 龍大2414-52(写)<sup>(32)</sup>
- \* 八七 三論玄義肝要抄卷一〜卷五 三冊 龍大2641-10(1349以前写)<sup>(33)</sup>
- \* 八八 三論玄義抄(肝要抄) 三卷 龍大2641-11(写)
- \* 九一 三論玄義記 二卷 龍大2641-12(1791〜1847写)<sup>(34)</sup>
- 九二 三論玄義記(聴記) 二卷 龍大2641-25(1769〜1841曇龍写)
- \* 九四 三論玄義懸談(譚) 一卷 龍大2641-14,15,16(1730〜1782慧雲写)<sup>(35)</sup>
- \* 九八 三論玄義玄談略抄 一卷 龍大2641-17(写)<sup>(36)</sup>
- 一〇四 三論玄義甲申記(筆記) 一卷 僧朗 龍大2641-29(1824写)
- \* 一〇八 三論玄義講録 四卷 龍大2641-19(写)<sup>(37)</sup>
- \* 一一〇 三論玄義講録 一卷 蜂屋良潤(1827〜1905) 龍大2641-20(写)<sup>(38)</sup>
- \* 一二五 三論玄義鈔(桂宮鈔) 三卷 貞海(1342) 龍大2641-13(1735写)<sup>(39)</sup>
- 一三四 三論玄義聴記 四卷 慧雲(1730〜1782) 龍大2641-26(写)
- \* 一二七 三論玄義抜出記 八卷 如実 龍大2641-28(1〜4欠)<sup>(40)</sup>

龍谷大学と三論教学(奥野)

また、龍谷大学図書館には、伊藤目錄には記載されていないが、例えば高雄義堅博士や前田慧雲博士が、「新三論・古三論」等の説を述べるにあたって着目した、直然房明道の『海印玄談』(「三論玄談」)のよつな文献も所蔵されている。

特に前田博士はよく『海印玄談』を参照しており、これらの写本を参照することによって、ある意味では前記『三論宗綱要』の執筆も可能になったのではないかと筆者には思われるのである。つまり、一九〇〇年代前半に龍谷大学において開花した三論教学に対する研究は、その底辺に地道な写本研究(書写)があったのではないかと予想するのである。

それはともかく、この時期になされた研究の中には、今日の研究水準からみても等閑視することのできない重要な論文が含まれており、最近、私は特に佐々木憲徳(憲昭)博士の三論学派研究をもう一度見直さなければならぬ必要を強く感じており、近々その方面の研究を進めて見たいと思つてゐる。

四 龍谷大学における宗教教育活動

さて、次に私が垣間見た龍谷大学における宗教教育活動についてふれてみよう。龍谷大学には大宮、深草、瀬田の三学舎に、それぞれ本館<sup>(41)</sup>、顕真館、樹心館<sup>(42)</sup>という三つの講堂(礼拝堂)があり、特筆すべきは学期間中、毎朝八時三十分より勤行と呼ばれるお勤めが行なわれていたことである。導師は本願寺派の僧籍を有した仏教学科や真宗学科の教員、それに事務職員がローテーションで勤めていることくであった。私も大宮の本館講堂、深草の顕真館での勤行に数回参加させていただいたが、予想通り(?)参加している学生は

- 一四九 三論玄私 二卷 龍大2641-30(1482清凉院写)
- \* 一五〇 三論玄疏文義要 十卷 珍海(1092〜1152) 龍大2641-31(写)<sup>(41)</sup>
- \* 一六一 三論宗経論章疏目錄 一卷 龍大2012-4(写)<sup>(42)</sup>
- \* 一六四 三論宗綱要 一卷 靈雄・義観 龍大2642-1(写)<sup>(43)</sup>
- \* 一七五 三論宗通途所用名目 一卷 龍大2012-14(写)<sup>(44)</sup>
- \* 一七七 三論(宗)判談集 三卷 龍大2012-4(写)<sup>(45)</sup>
- \* 一二三 三論祖師伝集(上・中) 一卷 龍大2962-2,3(写)<sup>(46)</sup>
- \* 一二一 三論要心鈔 一卷 龍大2012-4(写)<sup>(47)</sup>
- 二七五 浄名玄論 八卷 吉蔵 龍大研仏(写)
- 三〇一 肇論遊刃記抜粹 一卷 龍大2642-8(1775純識写)
- \* 三九〇 大乘三論略章 一卷 龍大2641-36(写)<sup>(48)</sup>
- \* 三九二 (大乘)四論玄義 二卷 均正 龍大2434-90(六冊、新写)
- \* 三九七 大智度論疏(現存七卷) 慧影 龍大2431-29(写)<sup>(49)</sup>
- \* 三九九 大般若経疏(現存九卷) 吉蔵 龍大2412-25(写)<sup>(50)</sup>
- \* 四〇四 大品般若経遊意 一卷 吉蔵 龍大2412-26(写)<sup>(51)</sup>
- \* 四八五 涅槃経遊意 一卷 吉蔵 龍大2416-16(同左)<sup>(52)</sup>
- 五四〇 法華経統略鈔略 一卷 龍大2413-117(写)<sup>(53)</sup>
- \* 六〇二 維摩経義疏(広疏) 六卷 吉蔵 龍大2417-112(写)<sup>(54)</sup>

(\*印は、龍谷大学図書館蔵書検索システムによって検索し得るものである。龍谷大学図書館では、現在も検索システムへの蔵書の遡及打ち込みを継続中なので、検索システムによって検索できない文献もまだ若干存するようである。)

少なかった。ただ、重要なことは毎朝厳肅な勤行が続けられているということなのであろう。また、毎月初めの深草における勤行の後には、学長による法話<sup>(55)</sup>がなされていた。

上記、勤行をはじめ龍谷大学における宗教活動は、学内組織として正式に位置づけられた宗教部<sup>(56)</sup>を中心に行なわれており、組織的に整っている感じがした。宗教部では、龍谷大学「建学の精神」<sup>(55)</sup>を具現化すべく、毎朝の勤行の他に、毎月十五日には顕真館でお逮夜法要を、十六日にはご命日法要を本館講堂で、二十一日にはご生誕法要を樹心館で行なっているほか、五月二十一日には降誕会を、十月十八日には報恩講を営むなど、概して法要が盛んであった。このほか、宗教部主催の特別講座や公開講演会も開催され、私も何回か足を運んだ。また、「成人の日」の前日には、宗教部主催の「成人のつどい」<sup>(56)</sup>が顕真館で行なわれ、この日は美しく着飾った女子学生を中心にキャンパス内が華やいていたのが印象的であった。この「成人のつどい」は、多分に学年末試験のため帰省して「成人式」に参加できない地方出身の学生のことを配慮してなされているものと思われた。

前にも記したように、龍谷大学における宗教教育活動は概して活発なような印象を受けた。もちろん、学生への浸透具合という点からいえば、おそらく本学や他の宗教系諸大学と同様の悩みを抱えているのであろうが、重要な点は真摯な活動が継続してなされているという点に尽きるのであろうと感じた次第である。

五 本願寺派の教育機関

次に私が見学することを得た本願寺派の教育機関について述べて

みたい。浅田先生のゼミに参加しておられた道元徹心先生のご紹介によって、六月と十二月に、道元先生も講師として出講されている次のような本願寺派の教育機関を見学することができた。

①行信教校（大阪府高槻市東五百住町三一四―一七）

②中央仏教学院（京都市右京区山ノ内御堂殿町二七）

本願寺派常見寺境内にある①行信教校は、「親鸞聖人の教えに従って、釈迦、弥陀二尊の正意を念じ念仏する行者を育て、人類の将来を明るく開くような人材を育成すること」を目的に、一八八二（明治十五年）年、当時の大阪府三島郡富田町本照寺境内に設立されたのを起源とし、一八八六（明治十九）年現在地に移転されたものといふから、今年（二〇〇二年）開校百二十周年を迎える本学と同等の歴史を有することになる。三年を修業年限とし、一学年三十名をもって構成され、これまで三、〇〇〇名以上の卒業生を輩出しているという。別に一年を修業年限とする行信仏教学院も併置されているが、受講生の年代も幅広く、また設置されている環境からしてまさにそれは私塾というか「寺子屋」という印象であった。そこには仏教育の原点があるようにも思え、私にはきわめて強い印象が残った。<sup>68</sup>

②中央仏教学院は、「浄土真宗本願寺派の僧侶になろうとする者又は教師授与の申請資格を得ようとする者に対して必要な教育を行い、更に教師で真宗学その他仏教に関する研究を志すものに対して研究指導を行う」こと（学則第三条）を目的に一九二〇（大正九）年本願寺境内に設立されたもので、現在地に移ったのは一九二八（昭和三年）のことであるという。予科（十名）、本科（百二十名）、研究科（三十名）からなり、それぞれ修業年限は一年となっている。それ

龍谷大学と三論教学（奥野）

二二一

龍谷大学と三論教学（奥野）

二二一

加者は各自が事前に検討してきた問題点を発表当日に発表者に質問のかたちで指摘するというスタイルで、それはさながら小さな学会のような雰囲気でもあった。手を抜いたレジュメを作成してくると、先生方を始め博士課程の諸氏から容赦のない意見が寄せられるので、おそらく入学したばかりの一回生は度肝を抜かれたことであろうと思ふ。私も折にふれて意見を求められたが、的確な助言をなし得たか正直にいつて心許なく、タジタジであった。

また、時間中になし得なかった質問とそれに対する発表者の回答は、ゼミのホームページ上の「掲示板」への書き込みによってなされることになっており、発表が終わっても発表者はしばらくの間、一安心とはいかないようであった。インターネットと電子メールを利用しての授業は確実に進んでいるようで啓発されるどころ大であった。

以下は、全員が浅田先生を指導教授とする院生というわけではないが、昨年度浅田ゼミに参加して発表した院生諸氏である。私が研修期間中お世話になった方々ばかりなので、ここにお名前と発表題名を記し、感謝の意を表したい。<sup>69</sup>

【修士課程二回生】

加藤拓至「普度撰述『廬山蓮宗寶鑑』について」

近藤博之「法然教学の研究」

米森俊輔「吉蔵教判成立に関する研究」

楠 光正「仏教説話の伝道性―今昔物語集において―」

鶴田大吾「智顛の「三諦三観」説の研究」

【修士課程一回生】

青木龍也「龍樹の空思想の研究」

に一九七二（昭和四十七）年に創立された通信教育部がある。<sup>70</sup>道元先生にご案内いただいて、就任されたばかりの北畠晃融学院長、白川晴顕学校教育部長先生に長時間にわたって貴重なお話を伺った。この場を借りて、改めて謝意を表したい。

六 浅田ゼミ

今回の研修期間中、年間を通じて、浅田先生による大学院文学研究科の「演習」（修士課程）に参加させていただいた（後期からは学部「演習」にも参加した）ので、次にそのことについてふれてみたい。

「演習」は金曜日の午後、大宮学舎で行われ、博士課程の諸氏の他、非常勤講師の道元徹心先生、小山昌純先生、若園善聡先生等も参加しておられた。龍大では指導教授による「演習」は「文献講読」とセットになって開講されていることと、後者が文字通りの「文献講読」であるのに対し（昨年度は『四教儀集註』の講読が行なわれていた）、浅田先生の「演習」は修士論文の作成に向けての研究指導という色彩が強く、毎週司会者を決めて担当者が各自の研究テーマに沿った発表を行なうという形式で授業が進められていた。発表時間は厳守させられ、学会並にベルまで鳴らす熱の入れようであった。どの大学でも大学院担当の先生方が「演習」の進め方についてご苦労されることは、よく仄聞するところであるが、比較的受講生の多かった昨年度の浅田先生は、「文献講読」の教授法と重複しないよう、「演習」では出来るだけ受講生の主体的研究姿勢を重んじ、上記のような発表形式の「演習」にされているように感じられた。発表担当者は、遅くとも一週間前にはレジュメを配布し、演習参

大谷欣裕「天台密教の研究―教判論に中心を置いて―」

下野了爾「中国仏教受容における疑偽經典の意義」

田中由香「貞慶の研究」

野呂 靖「明恵上人高弁の研究―仏光観を中心に―」

山口陽二「天台止観の研究―『六妙法門』を中心に―」

この中、「吉蔵教判成立に関する研究」と題して修士論文をまとめた米森俊輔君は、吉蔵の「三種法輪説」に関する従来の研究を徹底的に洗い直し、「三種法輪説」の原型が興皇寺法朗（五〇七―五八一）にあることを論証しようと試み、さらにこれまであまり顧みられることなかった吉蔵と地論教学の關係に照明を当てようと意欲的な研究を進めていて注目された。今春、同君は博士課程に進学したので、今後の活躍が期待される。<sup>71</sup>

七 醍醐寺のこと

さて、最後に研修中折にふれて何度も訪れた醍醐寺のことにふれておきたい。<sup>72</sup>醍醐寺は、京都市伏見区醍醐東大路町二二にある真言宗の総本山で、貞観十六年（八七四）、聖王（八三一―九〇九）が開いた日本三論宗ゆかりの寺である。

私は、一九八二年四月、大学院修士課程に入学したのであるが、その当時、平井俊榮先生が「演習」のテキストとされていたのが吉蔵最晩年の撰述と伝えられる『大乘玄論』であった。先生は、開講初日、現行大正藏経の底本になったとされる永仁三年（一二九五）刊行の『大乘玄論』版本奥書の次のような識語を紹介された。

晨旦名徳、法緯吉蔵、歴劫仕仏、三論顕揚、  
深奥宗義、末世如忘、先師悲此、專懷感傷、

彼遷化後、屢送星霜、弘安聖曆、第三初商、一十三歳、忌景云当、為資追福、大乘玄章、謹開印板、以耀余光、納清滝宮、法樂増莊、不凶斯印、回録遭殃、醍醐学侶、不耐愁腸、衣鉢各投、論文再彰、撰嶺雲尽、八不月涼、金陵風扇、一実華芳、所生慧業、廻向無疆、万乘聖化、徳備三皇、四海静謐、慶暨百王、七世恩所、仏道増長、広施群類、利益堂堂、于時永仁三年三月二十一日

菩薩戒比丘寂性

これによれば、寂性<sup>76</sup>の先師が日頃三論の衰微を嘆いていたが、文永五年（一二六八）に示寂した。そこで、その十三回忌に当る弘安三年（一二八〇）初秋に、先師の追福のために『大乘玄論』を開板し、醍醐寺清瀧宮に納めたという。しかし、図らずもこの版は火災にあつて焼失したため、醍醐寺の学僧たちが自らの衣鉢等を投じて再びこれを刊行したというのである。以上が永仁三年刊行の『大乘玄論』版本のおおよその由来であるが、醍醐寺僧侶が寄せた『大乘玄論』開版への情熱のほどが窺われ、興味の尽きないものがある。私は『大乘玄論』を手にするたびに、なぜかこの識語のことが思い出され、いつの日か醍醐寺を訪れたいと思っていたのである。浅田先生や伊藤隆寿先生のお勧めもあつて、上醍醐<sup>77</sup>まで時間をかけて何度もゆつくり見学できたのは、得難い経験であり、大きな喜びであつた。醍醐寺には、いまなお未整理の貴重な文献が多数蔵されるといわれ、昨年も聖宝に関する新たな資料が発見されたことが報道されてきた。一日も早く醍醐寺資料の全貌が公開されることを望むも

龍谷大学と三論教学（奥野）

二二二

龍谷大学と三論教学（奥野）

二二四

- た。
- (2) 浅田先生は本学にお見えになっていた頃の一齣を、先生の随筆集『宿縁を慶ぶ』（百華苑、二〇〇〇年）の「幸せ」って何」の中に記しておられ、興味深く拝読した。
  - (3) 先生ご夫妻には、お手持ちの電話回線を使わせていただいたのを初め、家族でご自宅にお招きいただきご馳走になったり、由緒ある場所にお連れいただくなど、一々詳しくは記さないが大変にお世話になった。
  - (4) 後に本文において述べるように、浅田先生のご高配により、私は主として龍谷大学の深草学舎に通うことになったが、寄宿先から深草学舎までは京阪宇治線「中書島駅」で京阪本線に乗換え、「深草駅」下車で約二十五分ほどであった。寄宿先からは次のような由緒ある寺院もほど近く、研修中幾度となく訪れた。
    - ① 勧修寺（真言宗山階派本山、京都市山科区勧修寺町仁王堂町）。古の名残をとどめる水池園の蓮の花が美しかった。
    - ② 隨心院（真言宗善通寺派の大本山、京都市山科区小野御霊町三五）。小野小町ゆかりの寺として知られる。なおついでながら、隨心院側の蕎麦屋の「そば」が絶品であつた。
    - ③ 醍醐寺（真言宗総本山、京都市伏見区醍醐東大路町二二）。醍醐寺については、本文中において少しくふりたい。
    - ④ 法界寺（真言宗別格本山、京都市伏見区日野西大道町十九）。別名「ひのやくし」としても知られ、親鸞聖人も深い因縁のあることで有名。平等院のそれに勝るとも劣らない見事な阿弥陀如来像があり、深い感銘を受けた。訪れる観光客も少なく、ひっそりとした境内の趣は何とも言えない風情があつた。

のである。

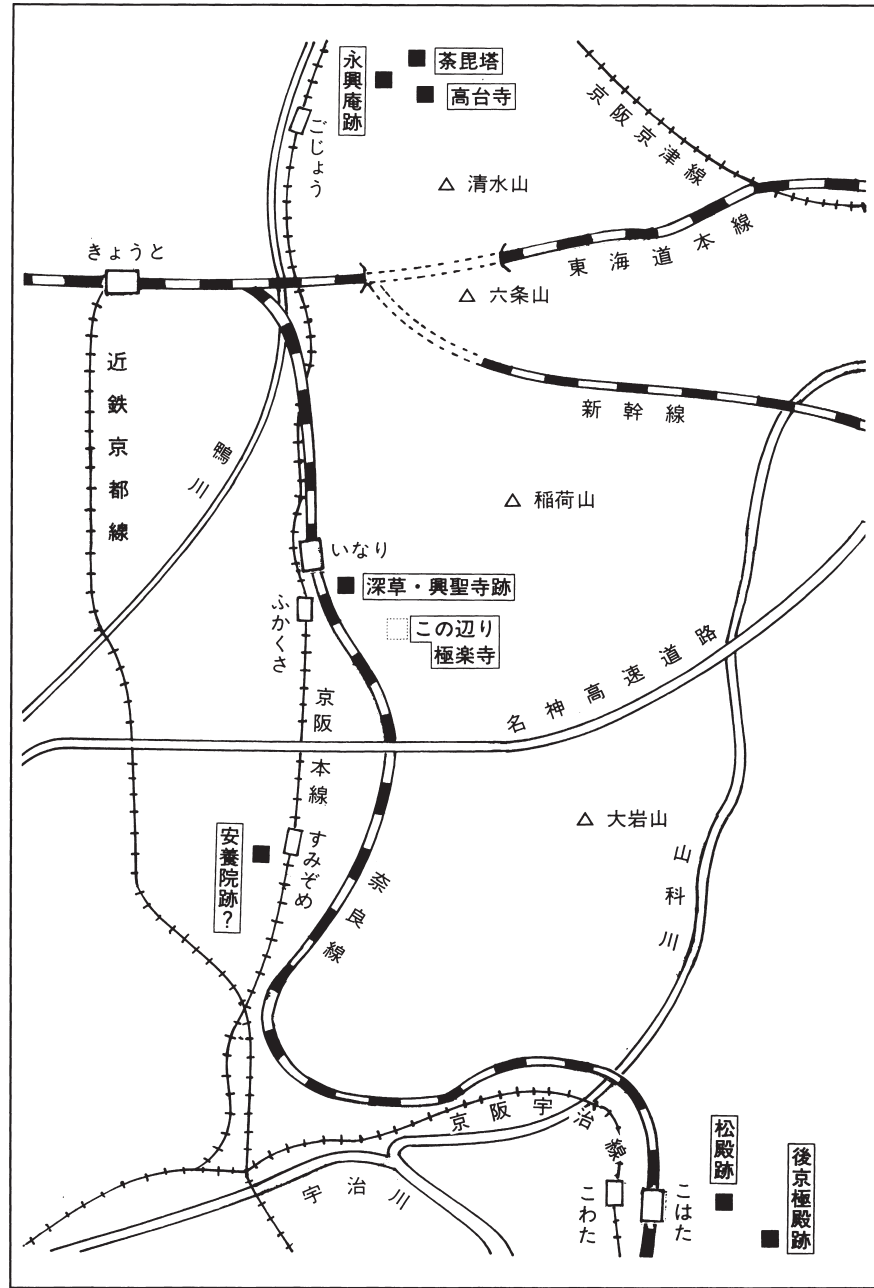
八 おわりに

その他、龍谷大学仏教文化研究所のことを初め、京都市内の大学・短大を中心に展開されている単位互換の連合組織「大学コンソーシアム京都」のこと、京都で出会った研究者のこと、参加した研究会や学会のこと、また若園善聡先生のご紹介によつて、先生と一緒に調査させていただいた永観堂禪林寺所蔵の文献のことなど触れるべきことも多いのであるが、すべて割愛することにした。

国内研修生活も終わりに近づいた二〇二二年三月二十三日午後、私は思い立って稲荷山に登った。その日は前日までの暖かな陽光とは打って変わつて、冷たい風雨混じりの一日であつたが、帰り際、運良く雲の切れ間から陽光が差した。傾きかけた春の陽光に照らし出される、稲荷山山頂付近から見た龍谷大学深草学舎は私にはことのほか美しく見え、一年間龍谷大学にお世話になつて本当に良かったとしみじみと思つたことである。このような貴重な時間を与えていただいた本学関係者、そして浅田先生はじめお世話になつた龍谷大学の皆様、とりわけ竹中尚文氏、道元徹心先生、小山昌純先生、若園善聡先生には心より御礼申し上げたい。その他、研修期間中ご縁を結んでいただいた多くの方々に感謝申し上げ、粗雑に過ぎた本報告を閉じたいと思つた。

註

- (1) 研修課題は、「中国・日本仏教における「一乘・三乘」の論争について」であり、正式な受入機関は龍谷大学文学部であつた。法界寺については、中野玄三『法界寺』（中央公論美術出版、一九七四年）参照。
- ⑤ 三室戸寺（修験宗別格本山、宇治市葛道滋賀谷二二）。枯山水・池泉・広庭からなる大庭園のつづじ、あじさい、蓮、紅葉など四季を通じた花模様が美しいことで知られている。
- ⑥ 萬福寺（黄檗宗大本山、宇治市五ヶ庄三番割三四）。
- ⑦ 平等院（宇治市宇治蓮華一六）。平等院は現在は単立になっている。なお、平等院内には浄土宗の浄土院と天台宗系の最勝院が存在している。ところで、白州正子「平等院のあけぼの」（『新版・私の古寺巡礼』法蔵館、一九九七年）によつて、平等院の山号が「朝日山」であることを研修中初めて知つた。したがつて、白州氏は平等院を訪れるのは早朝が良いといつているのだが、残念ながら私は朝日に輝く平等院を訪れることはついぞなかった。また、前掲の白州氏の一文によつて、宇治川を挟んで平等院の対岸に、平等院と同じ「朝日山」を山号とする恵心僧都源信に関わる恵心院があることを知り訪れてみた。
- ⑧ 興聖寺（曹洞宗、宇治市宇治山田町二七）。興聖寺では、毎日曜午前九時より日曜参禅会が行なわれていたが、恥ずかしなから一度も参することがなく、いまになって後悔している。また、寄宿先から山一つ越えた深草大亀谷には、夏目漱石も縁の深い黄檗宗の仏国寺があることを小山昌純先生に教えていただいた二度ほど訪れた。漱石と仏国寺のことについては、水川隆夫『漱石の京都』（平凡社、二〇〇一年、一一二―一二七頁）の記述を参照されたい。



深草・木幡周辺の道元旧蹟地図（守屋書新版、474頁より）

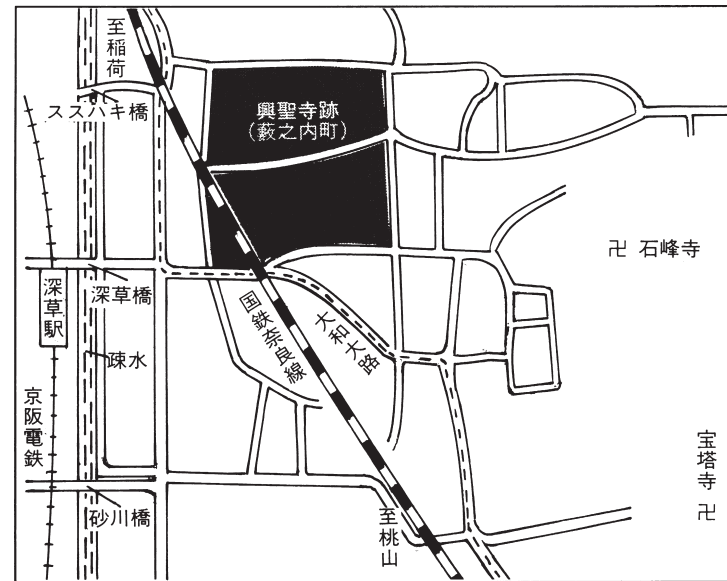
龍谷大学と三論教学（奥野）

二一六

- これらの寺々を訪れるときは、宇治の諸寺を除いては、原則的には時間をかけて徒歩で訪れた。道元禪師生誕の地といわれる松殿山荘と親鸞聖人の生誕の地に隣接する法界寺などはさほど遠くない距離にあることが歩いてみて実感できたことはよかったと思っている。
- (5) 今の松殿山荘は、一九三五年に大阪の高谷宗範が日本の茶道礼法を大成するために建てたものといわれる（『道元禪師—遺蹟巡拝のしおり』曹洞宗高祖永平道元禪師近畿地区遺蹟顕彰会、曹洞宗近畿管区教化センター発行、参照）。
- (6) 龍谷大学大宮学舎、京都市下京区七条通大宮（文学部三・四年生／大学院文学研究科）  
龍谷大学深草学舎、京都市伏見区塚本本町六七（文学部一・二・三年生／経済学部／経営学部／法学部／短期大学部／短期大学部専攻科／大学院法学・経済学・経営学各研究科）  
龍谷大学瀬田学舎、大津市瀬田大江町一五（理工学部／社会学部／国際文化学部／大学院理工学・社会学・国際文化学各研究科）
- 深草学舎を中心に三学舎は、授業時間に合わせてスクール・バスが運行されており、私も深草—大宮の移動は概ねこのスクール・バスを利用してもらった。
- (7) 隣室の五三三号室におられたのが、真宗学の鍋島直樹先生（法学部助教授）であった。鍋島先生については、後注（66）を参照。
- (8) 深草は、周知のように道元禪師が初開の道場「興聖寺」を開いた地であるが、同寺の考証については、守屋茂『道元禪師』

龍谷大学と三論教学（奥野）

二一五



深草・興聖寺跡図（守屋書旧版、31頁より）  
（注、図中の「国鉄奈良線」は現在は「JR奈良線」）

研究—京都周辺における道元とその宗門』（同朋舎出版、一九八四年、後に『京都周辺における道元禪師—前半生とその宗門』と改題、加筆訂正されて一九九四年、同朋舎より出版 参照。ちなみに守屋氏は、かつて龍谷大学で教鞭をとられていた。な

お、京阪「墨染駅」の近くには、道元禪師が閑居された深草安養院跡とされる欣浄寺（京都市伏見区墨染西柵屋町一〇三八）がある。参考までに、右に守屋書から関連する地図を掲げ、読者の参考に供したい。

- (9) 東山三十六峰については、三浦隆夫『東山三十六峰を歩く』（京都新聞社、一九九五年）を参照。なお、この書は二〇〇一年五月六日、浅田先生にご自宅にお招きいただいた際、先生の奥様に教えていただき、早々私も購入したものである。ちなみに先生のご自宅は第三十五峰の光明峰のすぐ麓にあり、純和風の素敵なお住まいであった。

(10) 石峰寺（黄檗宗、京都市伏見区深草石峰寺山町）。五百羅漢が見事であった。

(11) 宝塔寺（日蓮宗、京都市伏見区深草玉塔寺山町）。「深草山」と号し、多宝塔が素晴らしかった。

(12) 石峰寺、宝塔寺は、残念ながら私が滞在中、師団街道を挟んで紫英館前に建設されたマンションのため、学期後半からはお借りした研究室からは眺望することができなくなってしまった。京都の景観の保全と地域開発とは古くて新しい問題のようで、私の滞在中もしばしばその種の新聞記事を目にした。

(13) 一例をあげれば、紫英館内の研究室は原則的に二十四時間年中開放されていた。また、最上階は生協運営の教職員食堂となっており、教員と学生が楽しそうに食事している光景が羨ましかった。教職員食堂に限らず、深草学舎の学食は総じて長期休暇中も比較的良く開いており（営業しており）、とても便利だった。大学とは本来かくあるべきであろう。その他、私から見

龍谷大学と三論教学（奥野）

二一七

龍谷大学と三論教学（奥野）

二一八

都病院もその始まりは旧陸軍衛戍病院であることを前注（14）の中村書の記述により知った。

(16) 深草学舎は、昭和三十五年（一九六〇）年の土地取得に始まり、翌年の四月には「仏教の心を根底にもった経済人の育成を目的」に経済学部経済学科が開設設置されている。深草学舎と狭い道一つ挟んだ師団街道に沿いにあるのが、京都府警察機動隊なのであるが、その建物の中には往事の米軍施設を思わせる建物があった。

(17) 広報『龍谷』第五十号（二〇〇一年十二月十九日発行）参照。広報『龍谷』は編集「龍谷大学編集委員会」、制作「龍谷大学学長室」、発行「龍谷大学」によるもので年三回、すなわち三月、七月、十二月に発行されている。

(18) 北島典生「佐藤哲英先生の思い出」（『遠慶宿縁—佐藤哲英先生追悼集』（百華苑、一九八五年）参照。

(19) 顕真館完成当時の龍谷大学宗教部長が山崎教授であり、顕真館の竣工は龍谷大学による年表によれば、一九八四年三月のことである。

(20) この点については、例えば平井俊榮『中国般若思想史研究—吉藏と三論学派』序論「一 吉藏と三論—日本におけるその研究の回顧と展望」（春秋社、一九七六年）を参照。

(21) 前田博士は、本書第三章「教理の綱要」において、「一 破邪顕正、二 真俗二諦、三 八不中道、四 真如縁起、五 仏身浄土」の五項目にわたって、吉藏の思想を論じているが、前三項目は多分に凝然の『八宗綱要』の影響を受けたものと思われる。後二項目は本願寺派学僧としての前田博士の見識による

て進んでいると思われた点は多々あるが、それは一面では本学の遅れた教育環境を愚痴ることにほかならないので、ここではあえて一々記さないことにしたい。

(14) 後注（66）に記す第八十八回顕真館公開講演会における明治学院大学教授阿満利磨氏の講演、「仏教の新しい潮流—エンゲージド・ブディズム」によって知ることを得た中村尚司氏（龍谷大学経済学部教授）の『人びとのアジア—民族学の視座から—』（石波新書三六〇、一九九四年）中には、次のような記述がある。「京都は、日清戦争や日露戦争以来、海外侵略に重要な役割を果たした軍国都市である。敗戦後半世紀近い今日でも、軍都のなごりが残っている。龍谷大学の深草キャンパスは、陸軍の練兵場跡である。敗戦後も地名は変更されず、今日でも師団街道と第一軍道の交差点に位置している。転職のため、二三年ぶりに京都に帰り、深草に住むことにした私は、この地名群に複雑な思いを抱いたものである。地名もまた歴史的遺産の一部である。みだりに変更しないほうがよい、という京都人の考えには、侵略戦争の当事者だったことを忘れないでおこうという意味なら、それなりの根拠がある」（同書、八四頁）。

(15) 京都には旧日本陸軍の第十六師団がおかれ、深草にほど近い藤森には明治四十一年（一九〇八）竣工の師団司令部が聖母学院本館としていまも残されていた。道すがら、私も幾度となく目にし、見学もさせてもらったが、英国ビクトリア朝の宮殿を思わせる壮麗な建築物であった。師団司令部の竣工以後、深草周辺には次々と陸軍の施設が造られたようである。その総面積はおよそ一二万坪に及んだという。なお、藤森にあった国立京

ものであろう。なお、前田博士は、本書の「序」において「此編は、曾て京都本願寺大学林に於て講説せし時の筆記に係る」と述べている。

(22) 佐藤哲英『統・天台大師の研究』（百華苑、一九八一年）によれば、この論文は⑮「梁朝二十三家の二諦説」と共に一九二八年三月提出の佐藤博士の卒業論文『二諦論の研究』の一章であったという。卒業論文として、かかる研究がなされていたことに驚嘆するばかりである。

(23) 『講本三論玄義』に前後して龍谷大学では多くの「講本」が作られている。ちなみに、私は一九七九年、学部二年生の時に平井俊榮先生の「仏典演習Ⅰ」を受講し、『七十五法名目』を読んでいたしたのであるが、参考書として使用したのが龍谷大学編の『講本七十五法名目』（龍谷大学出版部、一九四二年）であったことを懐かしく思い出す。

(24) 同論文、一一三—一四頁参照。

(25) 後に本文においてふれるように、伊藤隆寿「三論宗関係典籍目録（稿）」にいう「164三論宗綱要 1巻 靈雄・義親 龍大262頁」は、その奥書によって、明治四十二（一九〇九）年、三井博士が東大寺において書写したものであることがわかる。

(26) 『龍谷大学和漢書分類目録（仏教之部）』（龍谷大学図書館一九二九年）参照。三論宗関係の書籍については、同目録五〇五—五〇八頁参照。

(27) 伊藤隆寿「三論宗関係典籍目録（稿）」（駒澤大学仏教学部研究紀要」第五四号、一九九六年三月）参照。

(28) 但し、すべての写本を厳密に調査したわけではないことを

お断りしておきたい。

- (29) 伊藤目録の指摘する写本以外の龍大所蔵の三論文献は、次の通りである。いま伊藤目録の番号のみを示す。  
32.54.74.102.140.236.238.266.269.299.300.324.389.409.412.463.494.496.502.515.533.569.590.597.601
- (30) 龍谷大学図書館蔵書検索システムによる請求番号「264.31-W/」（以下同）。なお、この『一乘仏性慧日抄』が前田慧雲博士による臨写本であることの指摘は、すでに浅田正博『一乘仏性慧日抄』における『一乘仏性究竟論』の影響（『仏教学研究』第四十三号、一九八七年三月、山崎慶輝教授定年記念論集『唯識思想の研究』永田文昌堂、一九八七年に再録）においてなされている。
- (31) 請求番号「264.139-W/」宝曆二（一七七二）年写。
- (32) 請求番号「264.152-W/」
- (33) 請求番号「264.111-W/1.2.3」各冊巻末に「光雲」「照空」の朱印がある。
- (34) 請求番号「264.112-W/1.2」宝雲述。
- (35) 請求記号「264.116/」慧雲述。
- (36) 請求記号「264.117-W/」別名『三論玄義開講』、『三論玄義開講要説』。
- (37) 請求記号「264.119-W/1.2.3.4」常明輯。
- (38) 請求記号「264.120-W/1.2.3」蜂屋良潤述、明治一七（一八八四）年講、上巻巻頭に『三論玄義末註録』を所収。
- (39) 請求記号「264.113-W/」別名『三論玄義桂宮鈔』栄慶写、享保二〇（一七三五）年。

龍谷大学と三論教学（奥野）

二一九

龍谷大学と三論教学（奥野）

二二〇

本は鎌倉初期写本で叡山文庫所蔵本（池田長田氏旧蔵本）であるという。請求記号「243.129-W/」一冊、頼瑤校合本の写本であるといわれる。

- (51) 請求記号「241.225-W/1.2.3.4.5.6.7.8.9」九冊。
- (52) 請求記号「241.226-W/」一冊、別名『大品経遊意』。
- (53) 請求記号「241.616-W/1」一冊。
- (54) 私はかつて龍大図書館のご好意によって、この文献を複写していただいたが、その複写物には請求記号として「写字台2413-117-1」のラベルが貼られている。ここに「写字台」とは、同図書館における「写字台文庫」の所蔵であることを示す。
- (55) 請求記号「241.7112-W/1.2.3.4.5.6」六冊。
- (56) 高雄義堅『三論玄義解説』（興教書院、一九三六年）一一―一二頁参照。
- (57) 前田慧雲『三論宗綱要』（丙午出版社、一九二〇年）六四頁参照。ここで前田博士は、『海印玄談』（『三論玄談』）の説によって、北土三論師の祖に曇鸞（四七六―五四二）を擬している。この点については、前注（20）平井書二八―三〇頁参照。なお、『海印玄談』（『三論玄談』）について、平井俊榮博士は、「その発想に斬新なところが見られるのが特徴で、三論に新説・旧説を設定したのも、おそらくこの人が最初であろうと思われる。南都三論の文献にはないことであり、凝然（一一四〇―一一三一）にも未だ見られない説である。この明道説が呼び水となつて、近代の仏教史家によって、僧詮ではなくて僧朗を基準として三論に新古を分つ説が一般的になり、新三論・古三論の通称が起るに至つたものであろう」（前掲書、一三四頁）と評して

(40) 請求記号「264.128-W/」一冊、この一冊に巻五―八が含まれる。

(41) 請求記号「264.131/1.2.3.4.5」武内道純写、明治三六（一九〇三）年。巻末に「明治三十六年六月武内道純謄写ス」と墨書があり、「高輪仏教大學第貳仏教中學蔵書」の朱印がある。

(42) 請求記号「201.24-W/」別名『三論宗初心初学抄』、『三論宗通途所用名目』、『三論要心鈔』、実慶他述、明治四四（一九一一年）。

(43) 請求記号「264.21-W/」靈雄・義観共著。三井淳辨写、明治四二（一九〇九）年。巻末に「明治四十二年 於東大寺写功畢 沙門淳辨」の墨書がある。

(44) 前注（42）の『三論宗経論章疏目錄』と同一文献。

(45) 請求記号「264.213-W/」「264.91-W/」（上巻のみ）、「264.92-W/」の三種の写本が所蔵される。請求記号「264.92-W/」の写本には、巻末に「文化十二年、沙門圭雄」の署名がある。文化十二年（一一八五年）。

(46) 請求記号「296.22-W/」巻上、巻中の二冊。「高輪仏教大學第貳仏教中學蔵書」の朱印がある。巻中奥書に「東大寺三論兼宗沙門長忍」の署名がある。

(47) 前注（42）の『三論宗経論章疏目錄』と同一文献。

(48) 請求記号「264.136-W/」吉祥述、長忍敬寛校閲、元文元（一七三六）年。巻末に「元文元年 更校閲了 沙門長忍敬寛」の墨書がある。

(49) 請求記号「243.490-W/6」

(50) 請求記号「243.163/1.2」二冊、巻第一七、巻第二一、原

いる。

(58) 江戸末期の文化文政（一八〇四―一八三〇）のころ活躍した真言宗の学僧とされる。『日本仏家人名辞書』一〇八五頁下参照。また、前掲平井書参照。ところで、明道に三論を学んだとされるのが、江戸後期の真宗の碩学とされる本願寺勸学曇龍（一七六九―一八四一）であり、曇龍には『三論玄義』の注釈書である『三論玄義聴記』があり、龍谷大学図書館に所蔵されている。伊藤目録92参照。

(59) 私が今回の研修前、龍大図書館に複写してもらつた請求記号「寄托E-66-2」のラベルのある『海印玄々録』は、次のような構成になっている。参考までに以下にその目次を掲げる。  
「三論玄義玄談、五教章玄談、遊心法界記玄談、十二門論宗致義記玄談、般若心経略疏玄談、法界無差別論疏玄談、法華遊意玄談、円覚経略疏玄談、勝鬘経太子疏玄談、楞伽心玄義玄談、十句義論玄談、首楞嚴経疏玄談、心王銘玄談、三類境玄談」なお、この写本の奥書には、「明治廿七年一月下浣於須磨浦大谷別荘寫訖 前田慧雲 誌」とあり、同写本は昭和七年六月一日、前田致遠氏によって龍大図書館に寄贈されたものであることが刻印されている。

(60) 前田博士は、『三論宗綱要』の中で、「是は一巻と云ふても、僅に十四五紙のものであるが、五門を分別して、その中四門が玄談で、第五門は入文釈であるから略してある。四門とは、一に一章大旨、二に立宗大綱、三に相承種類、四に諸家判釈で、第一章には三論の内容が略述してあり、第二章には三論の立宗に総別二種あると云ふことが論述して、第三章には三論宗の系



統があり、その中に北地三論の系統に就て一説が挙げられてある。一読の値あるなり」(九一〇頁)と評している。私はこの写本の翻刻を終えているので、機会があれば発表したいと思っている。

(61) 「真宗學座」の扁額を掲げる「本館」は、周知のように大宮学舎の「南翼」「北翼」「正門」等とともに国の重要文化財に指定されている。また、ライト・アップされる夜間は、昼間とは違った雰囲気を感じさせていた。

(62) 樹心館は、もともとは明治四十一年(一九〇八)に落成した大宮の図書館であった(その前は大阪の警察署の建物であったと仄聞した)、その後、現在の大宮図書館が完成した後、本願寺に移され、瀬田学舎建設の折に本願寺より移築されたものであると聞いた。私も瀬田学舎を訪れた際、見学したが、歴史を感じさせる重厚な建物であった。

(63) 二〇〇一年四月の上山大峻学長の法話は、例のタリバンによるバーミヤンの仏像破壊に関する法話であった。

(64) 宗教部には宗教教育課がおかれ、事務職員も配されている。宗教教育課では、新郎新婦の双方又は一方が龍大卒業生であること、仏前結婚式であることなど一定の条件を満たせば、本館講堂での結婚式も受け付けていた。また、研修中、宗教部による次のような刊行物を手にした。「祈りと願い」(りゅうこくブックス92、龍谷大学宗教部、二〇〇一年一月)、『顕真館公開講演会講演集』(りゅうこくブックス93、特別号、龍谷大学宗教部、二〇〇一年三月)。後者の『講演集』中には、宗教部による懸賞論文二本も含まれていた。

龍谷大学と三論教学(奥野)

二二一

(65) 龍谷大学では、建学の精神である浄土真宗の教え(Ⅱ親鸞聖人の精神)を共に学び、共に実践するために、次のように平易な言葉で五項目にまとめている。

- ・すべてのいのちを大切に「平等」の精神
- ・真実を求め真実に生きる「自立」の精神
- ・常にわが身をかえりみる「内省」の精神
- ・生かされていることへの「感謝」の精神
- ・人類の対話と共存を願う「平和」の精神

(66) 二〇〇一年六月七日には、第八十八回顕真館公開講演会として、明治学院大学教授阿満利磨氏による「仏教の新しい潮流―エンゲージド・ブディズム」と題する講演が行なわれ、私も興味深く聴講した。また、六月二十二日には、大宮学舎本館講堂において作家の高史明氏による「君たちは、自分が自分で信じられるか」という講演があった。なお、エンゲージド・ブディズムについては、例えば鍋島直樹「エンゲイジド・ピュアランド・ブディズムの探求―親鸞における真宗と学」(『龍谷紀要』第二十三巻第一号、二〇〇一年八月)を参照。

(67) 行信教校、行信仏教学院の、入学資格、入学審査、特典はそれぞれ次の通りである(以下、行信教校「入学案内」より)。

- 教 校……入学資格(A)中央仏教学院、又は地方仏教学院卒業生、(B)本願寺派教師資格保有者、(C)その他上記と同等以上の資格ありと認められたもの。入学審査は仏教学、真宗学の口頭試問。特典は卒業生は、本願寺派学階得業の予試並びに本試の免除。

龍谷大学と三論教学(奥野)

二二二

学 院……入学資格(A)高等学校卒業以上の者、(B)

旧制中学校卒業以上の者、及びそれと同等以上の資格を有すると認められたもの。入学審査は高校卒業程度の社会常識に対する口頭試問。特典は卒業生は、本願寺派の教師教修資格を認定せられる。

他に寄宿舎として、収容人員二十名(男子のみ)からなる「行信寮」があり、原則として新入生には入寮を勧めているようであった。

(68) 行信教校では、『一味』と題する冊子を発行しているほか、研究論文集『行信学報』を発行している。なお、開講されている講座名は次のとおりである(以下、行信教校「入学案内」より)。

- (1) 教行証文類講読
- (2) 観経講義
- (3) 和讃講読
- (4) 観経疏講読
- (5) 大経講義
- (6) 成唯識論講読
- (7) 宗教哲学
- (8) 伝道学概論
- (9) 会読指導
- (10) その他特別講座(随時)
- (11) その他三経・七祖・本典より

また、私が見学させていただいた二〇〇一年六月二十日には、

「末法思想の源流とその展開」と題する、龍谷大学非常勤講師長崎陽子氏の講演があつて、私も拝聴した。

(69) 中央仏教学院への入学資格、特典は次のようになっている。予 科……入学資格は義務教育を修了した者。特典は

- 本科出願資格、得度考査免除  
本 科……入学資格イ、高等学校または旧制中学校卒業生、ロ、中央仏教学院予科または宗派の認可した仏教学院予科修了者。特典は研究科出願資格・教師授与申請資格試験免除、得度考査免除、成績等によって研究科・龍谷大学短期大学部(仏教科)への推薦。

研究科……入学資格イ、中央仏教学院本科または宗派の認可した仏教学院本科卒業生、ロ、教師を授与された者。特典は本願寺派学階、得業、予試及び本試免除、成績等によって研究科・龍谷大学短期大学部(仏教科)への推薦。

(70) 通信教育部は、創立五十周年を記念して昭和四七年(一九七二)に開設されたという。宗派に関係なく、誰でも応募できるとのこと。毎年一、〇〇〇名ほどの応募があるという。

(71) 大学院浅田ゼミの諸氏には、研修生活が始まったばかりの二〇〇一年五月二日、雨をついての比叡山諸堂見学と一緒に参加させていただいたのを初め、コンパ等にも加えていただくなど、楽しい時間を共有させていただいた。心より御礼申し上げます。

(72) 米森君は、修士論文の一部をこのほどソウルで行なわれる

日本印度学仏教学会の第五十三回学術大会で『四論玄義』逸文に見る法朗の教判について」と題して発表し、その原稿を同学会誌に投稿予定であると伺った。

- (73) 醍醐寺は研修期間中に五度ほど訪れた。最後に訪れたのは、研修生活も終わりに近づいた二〇〇二年三月十一日(月)のことである。この日は今春、龍大大学院博士課程を終えた山田陽道君、前に記した米森俊輔君と一緒にあった。山田・米森君と随心院、醍醐寺、日野誕生院、法界寺等を見学して回ったが、それぞれ本尊の前で山田君が「恩徳讃」を称えてくれたのが心に残った。私にはおそらく生涯忘れ得ぬ思い出となるであろう。
- (74) 聖宝の伝記は、『本朝高僧伝』巻第八「城州醍醐寺沙門聖宝伝」(『大日本仏教全書』鈴木版)第六三巻六(三下)参照。
- (75) 醍醐寺および聖宝と日本三論宗の関係については、平井俊榮「鎌倉時代の三論教学」(『金澤文庫研究』第二六九号、一九八二年九月)を参照。また、大西龍峯「鎌倉期三論宗と禅宗」(『駒澤大学仏教学部論集』第十六号、一九八五年十月)もあわせて参照されたい。

- (76) 宇井伯寿博士の「大乘玄論解題」(『国訳一切経』諸宗部一)は、この寂性を「日本大藏経にある死怖論科釈の著者である」(三頁)とするが、「死怖論科釈」の著者は、『増補改訂・日本大藏経』第九十八巻「解題二」(講談社、五九頁)にいうように、性空(一六九七)であり、上記は宇井博士の誤認であろうかと思ふ。
- (77) 上醍醐には清瀧宮拝殿(国宝)があり、下醍醐には清瀧宮本殿(重要文化財)がある。

龍谷大学と三論教学(奥野)

二二三

- (78) このほど醍醐寺では、鎌倉前期の作とされる開祖聖宝の肖像画が発見されたという(二〇〇一年八月二十四日付、京都新聞による)。

- (79) 若園善庵先生のご紹介により、禅林寺永観堂所蔵文献の中、主として三論関係の文献を閲覧させていただいた。その中には元康『肇論疏』、観理『方言義私記』等の貴重な文献も含まれていた。いずれ若園先生や伊藤隆寿先生のご指導をいただきながら、詳しく調査してみたいと思っている。

(二〇〇二年六月二十五日記)

(追記)

龍谷大学における宗教教育については、笠原芳光「二十一世紀の仏教をめざして——龍谷大学の宗教教育」(笠原『宗教再考』教文館、一九八六年)も参照されたい。

龍谷大学と三論教学(奥野)

二二四